

生徒の意欲を引き出す「キャリア教育」を意識した実践研究

—「ホーム担任」「授業者」双方の立場から—

大工 恭奈

金沢大学大学院教職実践研究科 学習デザインコース

【概要】私が今接している高校生は日々時間に追われ、高校生活や勉強に対する目的意識は低く、将来を建設的に考えることが難しい。このような生徒たちの意欲を引き出すべく、従来のキャリア教育を見直し改善しようというのが本研究である。そして、生徒一人一人が「自分らしい生き方」を摸索し、そのために何をすべきか考え行動できるようになることをねらいとしている。そのために「ホーム担任」と国語の「授業者」という2つの立場からキャリア教育に取り組む。「ホーム担任」としては主にホームルーム活動と面談を通して、生徒たちの「自己分析」「自己理解」そして「自己実現」を支える。また、「授業者」としては従来の授業の中でキャリア教育を意識して行う。文章に対して生徒自身が考えを持って他者と共有し、筆者の考えや登場人物の心情・作者の生涯を学びながら、生徒一人一人が自分の生き方や内面を見つめられる授業をする。これら2つの立場から実践し分析していくものとする。

I はじめに

教員生活9年目を迎えるにあたり、自分のこれまでを振り返った時に反省しなければならないことが多くある。教師になった当初はとにかく教科指導に力を入れており、目に見える結果を重視していた。ホーム担任を毎年務めるようになってからは、生徒との日々の何気ない会話や昼休みや放課後の面談を通して、生徒が何を考えて毎日を過ごしているのかを徐々に知ることになった。そうする中で「自信がない。」「将来どうしたらよいかわからない。」「日々の目的がない。」「やる気が湧かない。」など鬱々とした感情を抱えた生徒が多いことに気が付いた。しかし当時の私は生徒の学力が向上すれば将来の選択肢が増え、前向きに将来を考えたり日々の生活への意欲が向上していくものだと思い込んでいた。3年生の担任を何回か経験する中でようやく、必ずしもそうではないということに気が付き始めた。いくら成績が伸びても、大きな可能性を秘めた自分の将来に目を向けようとはしない生徒や「自分には〇〇しかない」と頑なに意志を貫こうとする生徒など、高校生

活における生徒の最後の進路決定に携わる度に、これで本当によかったのかと思うことが多々あった。

そこで、この実践研究では形式化されたインターンシップや進学指導に偏りがちな進路指導など、学校内で行われる「キャリア教育」を私自身できる範囲で改善し、生徒の意欲を引き出せるようなものにしたいと考える。

II 実践目的

本実践は生徒のあらゆる意欲を引き出すことを目的とする。ここでの意欲は前向きに将来を構築しようとし、そのために自分は何をすべきかを考えながら努力し、生活全般を通して向上しようとする姿勢や態度を指す。平成23年11月文部科学省『高等学校キャリア教育の手引き』で「キャリア教育」の「キャリア」は「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」と定義されている。その積み重ねの中で、生徒たちが見つけた「自分らしい生き方」が意欲を引き出すきっかけとな

るのではない。しかしながら、「自分らしい生き方」は生徒一人一人の置かれた状況や身に付けた価値観によって変化していくものであり、それを積極的に模索していくことで意欲が引き出されるのではないかと考えた。生徒のあらゆる意欲を引き出すために「キャリア教育」を意識して実践していく。

Ⅲ この実践における「キャリア教育」とは

平成21年3月『高等学校学習指導要領総則』に「生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行い、キャリア教育を推進すること」とあり、将来の道の選択のためには生徒が自己の在り方生き方を考えることが大切で、そのためにはキャリア教育が必要だとわかる。また、キャリア・カウンセラーの白木みどり氏は著書『人間としての在り方生き方をどう教えるか』で「自己実現のためには、という自己の課題設定から、自己の個性・適性・能力の理解を前提として、発達段階に応じて何をすべきかの短期、長期的課題解決に向け、啓発的体験活動を取り入れながら支援するものであり、さらに将来設計を実現させるための現実把握と進路選択における副行路(バイパス)等の情報提供とともに生徒一人一人に応じた(進路相談)キャリア・カウンセリングを実施するという一連の指導プロセスを含有してこそ、在り方生き方の指導というにふさわしいはずである。同時に在り方生き方指導には、課題解決の機能的側面の指導のみならず生徒一人一人にふさわしいよりよい価値観形成を支援するという視点が求められる。」と述べている。ここから、生徒が自己実現に向かうためにはその段階に応じた課題設定や自己分析、個に応じたカウンセリングなど、さまざまな要素が必要であるとわかる。

これらを踏まえて、私が目指すキャリア教育は職業・進学先にとらわれることなく、この先の未来をどのように生きていきたいか、またど

のような自分であれば幸せであるか、それを生徒と共に教師も模索し続けていき、それが最終的に生徒一人一人の意欲の向上に繋がっていくというものであると考えた。そして自分らしい生き方を模索するために、以下の4つの要素が必要であると位置づけた。

自分らしい生き方模索のため心掛ける4要素

- (1) 過去の自分を知り、現在の自分の適性・能力・性格などを把握し分析すること。
- (2) 自分にふさわしい価値観を得るためにも、他者の視点から様々な考えに触れ、それらを受け入れること。
- (3) (1)(2)を踏まえた上で、未来に目を向けて自分らしい生き方を模索すること。
- (4) 自己実現のために、今何をすべきか考えて努力すること。

Ⅳ 実践方法

先に述べた「自分らしい生き方模索のため心掛ける4要素」を意識して実践する。対象は以下の通りである。

対象クラス	1年生担任ホーム (男子21名 女子20名)
対象とする時間	ホームルーム活動 国語総合(現代文分野) 面談は昼休みや放課後を利用して行うものとする。
実施期間	平成29年4月10日(月)～ 平成29年12月22日(金)

1. ホーム担任の立場から

ホーム担任としてはホームルーム活動(以下HR)、昼休みや放課後の個人面談などの機会を利用して実践する。その際先に述べた「自分らしい生き方模索のため心掛ける4要素」を入れ込み、生徒が考えるための手助けとなるようにした。主にHRでは生徒41名に対して、この時期に考えてほしいこと、そしてそれを考える意味などを説明し、一つ一つの活動が全て自

分らしい生き方を考えることに繋がるという認識を共有してもらった。また、個人面談の際には必ず面談ノートを利用した。この面談ノートは面談時だけでなく、面談前に生徒一人一人がじっくりと考えて表現することや、面談後にホーム担任がコメントを残すなど寄り添う形で使用した。面談ノートについては生徒たちに次のようなルールを設けた。

面談ノート作成にあたってのルール

- (1) HRで担任から説明や指示を受けたら、ノートに自分の考えや気持ちを率直に書くこと。
- (2) テストでもなく、コンクールなど多くの人の目に触れる文章でもないので、形にこだわらず自由に書くこと。
- (3) 面談前日には面談ノートを必ず提出すること。

なるべく生徒がリラックスして取り組み、自分の本音を語れるようにこのルールを設定した。面談時は面談ノートを基にしながら、より深く生徒から話を聞いたり、一緒に整理したりした。またその際には生徒の発言は必ず受容し認めることを心掛けた。

このホーム担任としての実践は、今まで担任として取り組んできたことを改めて整理して行うものである。そして今回は担任として行うキャリア教育に加えて、次の「2. 授業者の立場から」に示した通り、ホーム担任としての視点を持ちながら教科の授業内でもキャリア教育を意識して実践していく。

2. 授業者の立場から

主に1年国語総合(現代文分野)では「自分らしい生き方模索のため心掛ける4要素」の「(2)自分にふさわしい価値観を得るためにも、他者の視点から様々な考えに触れ、それらを受け入れること。」を重点的に取り入れて授業を行う。現状として年間指導計画に記載されている教材は必ず扱わなければならない、その時期に応じた学力レベルへ到達することが求め

られるなど、従来現場で行っていた授業を変えることは難しい。平成23年11月文部科学省『高等学校キャリア教育の手引き』で「各教科におけるキャリア教育の実践は、学習意欲の向上や学習習慣の確立にもつながることが期待されている。」とあり、一教員として教科の中でキャリア教育に取り組みば学習意欲の向上は勿論のこと、自分らしい生き方を模索することにも多少は繋がっていくのではないかと考えた。そこでこれまでの授業の中にキャリア教育を意識した授業内での活動「キャリア活動」を設けることにした。この実践における1年国語総合(現代文分野)の「キャリア活動」を次のように位置付けた。

1年国語総合「キャリア活動」の位置づけ

- (1) これまでの文章読解や内容理解にとどまることなく、その文章に対する自分の考えをもつもの。
- (2) クラスメイトの考えも知ることで、より一層自分の考えを深めていくきっかけとなるもの。
- (3) 評論における筆者の考え、小説における登場人物の言動・心情や作者の生涯などを学ぶ中で、自分の生き方や内面を見つめられるもの。

年間指導計画の都合上、キャリア活動に授業内であまり時間をとれない場合もある。しかし、従来の授業にこの活動を加えることで、自分以外の考えや価値観に触れて、自らの考えを深めることに繋がると期待する。

V 実践内容

1. ホーム担任としての実践

この実践においては、次に示した資料1「自分らしい生き方模索のためのホーム計画表」に基づいて進めていくものとする。そしてこのホーム担任としての実践は次の「2. 国語総合(現代文分野)での実践」を行う上での基盤となるものであると考えて行う。また、この実践は生徒のノートや面談内容からの個人特定を避け

るため、支障のない範囲での紹介にとどめる。

資料1 自分らしい生き方模索のためのホーム

計画表

大まかな行事予定	ホームでの「自己実現」にむけての取り組み	
学校行事	過去を振り返り、現在を見つめる活動	未来を描く活動
1学期 ガイダンス エンカウンター 総体総文 遠足 類型・科目登録説明会 進路講演会 球技大会 保護者懇談会	(2)自分の「これまで」を振り返る ・小学校から現在までのエピソード ・自分に影響を与えた人 ・性格分析	※入学後すぐ (1)これから「なりたい自分」について考える。 ※夏季休業中 (3)憧れの「職業」「大学」を調べる。
2学期 オープンキャンパス 文化祭 新人大会 類型登録 進路希望調査 保護者懇談	(4)クラスメイトのいいところを探す。 ・友人のいいところ ・印象に残ったエピソード	(5)これから「なりたい自分」について考える。 (2回目)
3学期 進路希望調査 卒業式	(6)今、自分は何をすべきかを考える。 ・「なりたい自分」になるための具体策 ・どのように毎日を過ごしていけばいいか	

(1)これから「なりたい自分」について考える。

(4月実施)

①実践内容

入学式後、ホームの保護者と生徒たちにこれからの高校生活の中で「自分らしい生き方」を考えながら勉強や部活に励んでほしいという旨の話をした。次の日のHRでは、面談ノートにこれから「なりたい自分」について考えて書かせた。一年後、高校卒業後、10年後、それよりも先の未来で、どんな自分になりたいか、どんな自分になれていたなら幸せかを考えさせた。

②結果・考察

一人どうしても書けない生徒がいたが、その他の生徒は熱心に自分のこれからを考えている様子だった。また、生徒が書いた内容を(1)高校卒業以降の将来の「なりたい自分」、(2)高校生活を送る上でのこれから「なりたい自分」、(3)自らの内面を見つめてこれから「なりたい自分」、といったように3つに分類した。(1)について書いた生徒は22名、(2)に関して書いた生徒は19名、(3)について書いた生徒は1

2名であった。勿論、複数の視点から「なりたい自分」を考えた生徒もいた。高校入学後すぐということもあり、将来に明るい展望を抱く生徒や高校生活に対する意欲を強く持っている生徒が多いという印象を受けた。なお、この時の面談ノートの内容を3つの分類ごとに紹介したものが資料2である。

資料2 これから「なりたい自分」分類別回答 (一部抜粋)

(1)高校卒業以降の将来の「なりたい自分」

- ・県外に出て一人暮らしがしたい。
- ・司書になりたいけど、本当に自分に向いているのかわからない
- ・整備士になって機械をいじりたい。
- ・母親がすすめてくれたから理学療法士になりたい。
- ・生きがいをを感じる仕事に就きたい。

など

(2)高校生活を送る上でのこれから「なりたい自分」

- ・色んな子と仲良くしたい。
- ・英語が苦手だから頑張りたい。
- ・部活で全国大会に行きたい。
- ・勉強と部活を両立したい。
- ・不合格になったら恥ずかしいから小テストも頑張りたい。

など

(3)自らの内面を見つめてこれから「なりたい自分」

- ・優しくて、他人から頼られるような存在になりたい。
- ・他人から必要される人になりたい。
- ・他人に頼ってばかりなので、自分から行動できるようになりたい。
- ・前向きになりたい。
- ・怠けている時など、自分で生活を立て直したい。

など

生徒がここで考えたことが今後どのように変化していくのか、生徒の変容を見守りたいと思うと共に、この時点で生徒がどの程度自分のことを考えているのかを掴んだので、今後の指導に活かしていきたいと考えた。

(2)自分の「これまで」を振り返る。(6月実施)

①実践内容

6月に入って高校生活にもだいぶ慣れてきたころであると思われたため、落ち着いて一人ひとりが小学校時代からを振り返り、現在の自分自身を見つめる時間をとることにした。質問項目は平成22年度厚生労働省委託事業「高校におけるキャリア教育実践講習～キャリア・コンサルティングの理念・手法を活用し、学校現場におけるキャリア形成支援を担う人材を育成～」資料の生徒に自己理解を促すための「自分史シート」を参考にして資料3のようにつくった。

資料3 自分の「これまで」を振り返る23の質問

小学校

- 1 どんな性格？
- 2 勉強や習い事で何が好きだった？
- 3 お家の人や先生から褒められたことは？
- 4 叱られたことは？
- 5 当時友だちに自慢できることは？
- 6 大きくなったら何になりたかった？
- 7 友だちとどんな遊びをした？

中学校

- 1 何に熱中してた？
- 2 一番努力したことは？
- 3 一番嬉しかったことは？
- 4 一番悲しかった(悔しかった)ことは？
- 5 大きくなったら何になりたかった？
- 6 友だちにどんな人があるか？(エピソードなど)
- 7 学校行事の思い出
- 8 小学生の頃と比べて変わったことは？

高校(現在)

- 1 何に熱中している？
- 2 「これだけは負けない」と思うことは？
- 3 一番努力していることは？
- 4 一番嬉しかったことは？
- 5 一番悲しかった(悔しかった)ことは？
- 6 将来何になりたい？
- 7 尊敬している(憧れの)人は？
- 8 中学生の頃と比べて変わったことは？

生徒たちに振り返りをさせる際、「これまで」整

理して意識していなかった自分を知ることが「これから」を考える上で大切だと話し、各自取り組ませた。

②考察

生徒たちに質問に答えてもらった後に面談ノートを用いて面談すると、今まで以上に生徒一人一人のこれまでの背景や現在の興味関心など、私自身深く知ることができた。生徒の基盤となる部分を改めて確認することが、ホーム担任として生徒自身の自分らしい生き方の模索を支える上で大切なのではないかな。また、生徒のこれまで生きてきた過程を知ることが、具体的な類型登録や進路指導の面からみても効果的であると思われる。

(3)憧れの「職業」「大学」を調べる。(7月～8月〈夏季休業期間を含む〉での実施)

①実践内容

7月に学年集会の中で類型登録説明会があり、どのように文系・理系を選択し、理科・社会の科目選択をしていくのかを生徒たちは理解したようだった。また夏季休業期間に入る前に「憧れ」でもよいので、興味のある「職業」や「大学」を一つずつ調べるように伝えた。その際、調べる方法や調べるべき事柄など、生徒たちに最低限の指導を行った。基本的には生徒が自分で調べてきた「職業」「大学」を面談の中でもう一度一緒に調べたり考えたりするような流れで、じっくり時間をかけて深めていった。

②考察

8月の補習期間中は本校1年生全体で「大学調べ」を行った。それも手伝ってか、ホームでは「職業」や「大学」をパソコンで調べるだけでなく、パンフレットを取り寄せたり、実際に足を運んだりして自主的積極的に調べる生徒も多かった。また、今年度は自由参加でいいといわれていた地元大学のオープンキャンパスに自主的に35人の生徒が参加した。(他ホームは10名程度の参加者である。)この時点で

の憧れや興味を抱く「職業」「大学」は今後変化していくものであると思うが、自分で自由に調べるといふこの活動は生徒に将来を考える意欲を持たせたのではないかと考えた。

(4) クラスメイトのいいところを探す。(10月実施)

① 実践内容

9月最初に文化祭を終え、生徒たちも打ち解けてお互いのことを理解し合った頃、クラスメイトのいいところを考える機会を設けた。(1)クラスメイトのいいところ、(2)印象に残ったエピソード、(3)自分と比べてクラスメイトのいいところを考えて面談ノートに書かせた。この時のホームの生徒同士の人間関係を考慮し、ノートの内容は他のクラスメイトに見せることはないということを約束した。そして他者のいいところを探すことは自分自身の内面を見つめることにもなるため、生き方を考えるきっかけになると話し、取り組んでもらった。

② 結果・考察

集めたノートを分析したところ、(1)クラスメイトの「いいところ」について書いた生徒は39名、(2)印象に残ったエピソードについて書いた生徒は15名、(3)自分と比べてクラスメイトの「いいところ」について書いた生徒は19名であった。(1)については漠然とクラス全体の「いいところ」を挙げた生徒も多かったが、個人名を挙げてそれぞれの「いいところ」を説明した生徒も7名いた。(2)のエピソードはやはり文化祭関連のものが多く中で、日常でのエピソードを挙げた生徒は4名いた。(3)自分と比べた時のクラスメイトのいいところは、各々がしっかり捉えている印象だった。次の資料4は面談ノートから特徴的な生徒を紹介したものである。

資料4 クラスメイトの「いいところ」を探す 生徒R・生徒Mの面談ノートから

(一部抜粋)

生徒Rの場合

- (1) Yちゃんは教えるのが上手。
- (2) 体育のバドミントンで苦手な人にコツを教えてあげていた。
- (3) 教える時に言うだけでなく、自分もやって見せてるのが親切。

生徒Mの場合

- (1) いい人がたくさんいる。
- (2) 体育で転びそうになった子をTさんが支えて助けてあげていたのが「かっこいいな…」と思いました。
- (3) みんなよく自分のことを考えているし、そこは真似したいです。

資料4で挙げた生徒Rと生徒Mは、自分とは異なるグループの生徒のいいところを取り上げて書いている。生徒Rと生徒Yは同じ部活動に所属しているが、クラス内ではあまり一緒にいるところは見かけない。生徒Yは物静かな生徒であり目立たないのだが、今回生徒Rは生徒Yのいいところを発見し認めているということがノートからわかる。また、生徒Mは体育の時間の生徒Tの咄嗟に友だちを助けた行動に気が付き、「かっこいい」と感心している様子が見える。生徒Mは普段あまり他者を褒めることなく、自分自身にも厳しい性格であるため、今回のことは私には意外だった。また(3)ではクラスメイトのいいところについて「真似したい」とも述べており、他者のよさを認めて自らもそうなりたいという姿勢が見える。

私は最初ホームで話した通り、他者のいいところを探し、自分の内面と照らし合わせることで自分の生き方を見つめることになると考えており、この活動を終えてもその通りだと感じている。しかし、効果はそれだけではなかったと感じる記述がノートにあった。(1)の記述に生徒N「雰囲気がいい」、生徒I「独りぼっちになる人がいなくて、クラスに恵まれていると思

う」、生徒K「落ち着いていて過ごしやすい」とあった。生徒Iは引っ込み思案な生徒であり、生徒Kは中学時代に友人関係に悩んだ経験から、対人関係で不安を抱くことの多い生徒である。これらはクラスメイトのいいところを挙げる際に出てきたものだが、この実践を含むホームでの活動が功を奏したのではないかと感じた。実践や分析がまだ不足しているが、キャリア教育と学級経営には関連性がありそうだと考える。

(5)これから「なりたい自分」について考える。

(1 2月実施)

①実践内容

入学してすぐにこれから「なりたい自分」について書かせた。そして類型登録を終え、12月に入り2学期も終わりにさしかかった頃、もう一度同じテーマで考えさせた。

②結果・考察

4月実践時と同様に分析を行う。(1)高校卒業以降の将来の「なりたい自分」について書いた生徒は9名、(2)高校生活を送る上でのこれから「なりたい自分」について書いた生徒は6名、(3)自らの内面を見つめてこれから「なりたい自分」について書いた生徒は32名であった。1回目と比較した際の大きな変化は(3)の内面を考えた上での「なりたい自分」について書いた生徒が大幅に増えたことである。この要因は高校生活に慣れたことや、将来まだ何がやりたいか明確でないということが考えられる。この結果を踏まえてこれからホーム担任としてしなければならないことは、生徒たちに「なりたい自分」のイメージを具体的に持たせることである。そしてこの後実施予定の「⑥今、自分は何をすべきか」で、これからの「なりたい自分」になるために、今すべきこと(具体策)を生徒たちに考えさせていきたい。

2. 国語総合(現代文分野)での実践

授業での実践を行うにあたり、「IV 実践方

法 2. 授業者の立場から」で示した「1年国語総合『キャリア活動』の位置づけ」に基づき、各単元でキャリア活動を実践していく。

(1)随想 河合隼雄『ふしぎと人生』(4月実施)での実践

概要(指導書より抜粋)

人が「当たり前」に感じることを「ふしぎ」と思う人は偉大だ。子どもの世界は「ふしぎ」に満ちており、答えを聞いて知識を蓄える一方、自分なりに「説明」して「納得」することもある。それは「物語」であり、人類はその存在を深めるため「神話」という「物語」を持った。普遍的な「説明」である「自然科学」に比べ、「神話」は現象の「説明」としては都合が悪いが、自分と「世界」との関わりを示すには最も適当な物語である。

①キャリア活動の内容

この単元でのキャリア活動は主にア～ウの3つの流れで行った。

ア 「雨はなぜ降るの?」と小さな子どもに聞かれたらどのように答えるか、について生徒は一人一人考え、子どもの質問に対する返事をワークシートに記入する。

【キャリア活動の位置づけ(1)】

イ 周りの友だちと発表し合い、たくさんの答えを集めた後に「神話」か「自然科学」かに分類する。前時までに本文を読解する中で「神話」と「自然科学」の定義は確認済みであり、生徒はそれを参考にして分類することになる。指導書によると「神話」は「各部族や民族が『ふしぎ』や『驚き』を心に収めるために語った『物語』であり、特に『いかにして我々はここに存在するのか。』という、人間にとって根本的な『ふしぎ』に対して答えるもの」であり、「自然科学」は「『神話』では説明しきれない、すべての『ふしぎ』な現象を、人間の内向的世界を関わらせないで、人間を切り離して観察して作った普遍的な話」である。分類後、周りの人の答えを見た感想をワークシートに記入する。

【キャリア活動の位置づけ(2)】

ウ 活動イを踏まえて、「雨はなぜ降るの?」という同じ一つの問いに対する答えに違いが出るのはなぜか、について一人一人考えてワークシートに自分の考えを書いて発表し合う。

【キャリア活動の位置づけ(3)】

②結果・考察

活動ア～ウを行う中で、生徒がどのように変容したかを分析する。なお、今回焦点を当てるのは一連の活動の中で大きく変容の見えた生徒7名である。生徒がワークシートに記入したものは一部、資料5で紹介しておく。

資料5 『ふしぎと人生』ワークシート

	ア「雨はなぜ降るの?」に対する答え	イ グループワーク後の感想	ウ 「違い」が生じる理由
生徒M2	雲にいる神様が泣いているから。	神話が多いと思った。自然科学の人は少ない。	自分が体験したことや、そのことについて知っていることなどが違うので考え方も違ってくるから。
生徒S	まず空気が解けて水になる。それで気温が低い時に雲が溶けて雨になって降るんだよ。	神話を使って説明する人が多いのがわかりました。また子どもには難しい自然科学を教えるのではなく、子どもの興味をひいたり、自分なりの理解ができるような神話の方がいいと思いました。	人それぞれ生まれてからの体験したことが違うため、考え方や価値観の違いが生まれてくるから。
生徒H	上空にある水蒸気が水になり落ちてくるから。	やっぱり小さい子どもになぜ雨が降るのか聞かれたら、神話の方の答えが多くなると思った。	人それぞれに違う方向性を持ちながら考えているため、一つの意見に対して別々の重要だと感じる部分を見つけて、そこから人それぞれバラバラの知識量の中で考えているため、どこが重要だと思うのか、どれだけ自分の知っている言葉の中でより詳しく説明できるのか一人一人違うため。
生徒T	太陽からの光で海の水が温められて雲ができるから。	いろんな考えを聞くことができ、新しく知ることができた。	一つのものを見たり聞いたりした時に、一人一人の感じ方が違って、そのものに対する思いが違ってくるから。
生徒N	雨は降るものだから。	自然科学の考えを使って答えるよりも、神話の考え方を使得って答えている人が多いと思った。	その人が今までに体験してきたことが違うから、考え方も少しずつ違ってきていると思う。
生徒I2	雲が太陽ばっかり出でるとすると置いて泣いちゃうから。	それぞれの捉え方が人様々。	その人が生まれてきた境遇、育った環境、体験してきたことによって自然科学だという捉え方、神話だという捉え方がその人その人によって変わってしまうから。
生徒O	空が泣いているから。	神話の方が多かったです。	その人のこれまでの人生の育ち方や本などで体験してきたことによって、言葉の意味・感じ方が変わってしまうから。

活動アで生徒たちは子どもの質問に対する答えをすぐにワークシートの吹き出しに書いていた。そして自分の答えを書いた後に、活動イで周りの人と発表し合って分類し終わって書いた感想は、生徒Mが「神話が多いと思った。自然科学の人は少ない。」としたように、分類した際の数に関するものが多かった。その中で生徒S・生徒Hは、小さな子どもに対する答えだということを配慮した時、「神話」の方が適しているのではないかと考えていた。二人は活動アの際は雨が降る理由を科学的に説明しようと

していたが、周りの人の答えを聞いて分類する中で気が付いたようである。また、生徒Tはこの活動を通して「新しく知ることができた。」と感想を書いており、授業中にも様々な答えを聞いて意外そうな表情だった。

活動イの感想の中で生徒Iが「それぞれの捉え方が人様々」と書いていた。この感想はクラスで一人だけだったので、活動ウに入る前にクラス全体で取り上げた。彼は皆の前で「子どもの質問に対する答えとして『神話』か『自然科学』かで答えるという違いがあるだけでなく、同じ答えでも分類が違うこともあると思う。」と説明した。私が「分類が違うものがあつたの?」と尋ねると、生徒たちは近くの席の子とワークシートを交換して確認し始めた。いくつか見つかったが、その中で一番話題になった答えは生徒Nの「雨は降るものだから。」である。この答えを多くの生徒はどちらでもないと分類していた。しかし、その中で「神話」に分類した生徒が5人いた。生徒Y2はこの答えを「神話」とした理由を「迷ったが、理論的ではないので『神話』に位置付けた。」と話した。そして答えた本人である生徒Nは自らの答えを「自然科学」に位置付けており、その理由を『『神話』のような物語ではなく、雨が降るというのは理由を問うまでもない自然界の当然だから『自然科学』とした。」と話した。後に類型登録の際に生徒Nは理系を選択しており、数学や理科が好きなNらしい解答であるとクラス全員が納得した瞬間だった。

これらのやりとりの中で、活動ウのここでの「このような違い」は「雨はなぜ降るの?」に対する答えの違いとその答えを分類する時に生じる違いの2つの意味があるということ全員が理解することができた。なぜこのような違いが生まれるのかを一人一人考え、ワークシートに書いた。互いの考えを発表し合う中で、このような違いが生まれる理由として、自分がこれまで体験してきたことや得た知識、置かれた環境などの違いが考え方・感じ方の違いを生

むからだ、と多くの生徒が考えていることがわかった。その中で生徒I2と生徒Oは「生まれた境遇」「育ち方」など家庭環境や教育環境の違いにまで触れていた。また生徒Oにいたってはこれまで読んできた「本」も理由として挙げており、読書家らしい自分に引き寄せた答えになっていた。また、考え方・感じ方の違いは言い換えると「どこが(何が)大切か」「捉え方」などの「価値観」の違いであるということにもなる。

この単元を終えて振り返ってみると、最初に私が設定していた「雨はなぜ降るの？」の自分や周りの答えを分類し、自分とは異なる答えを受け入れながらその違いが生まれるのはなぜかを考えるというキャリア活動は、それ以上の効果をもたらしたのではないかと考える。当初私は答えの違いにだけ注目し、その違いを価値観と捉えてキャリア活動を計画していた。しかし生徒が分類する上での捉え方の違いに気が付いたことで、より深く一人一人の違いについて考える活動になったと考える。

(2) 評論 山崎正和『サイボーグとクローン人間』(6月実施)での実践

概要(指導書より抜粋)

現代人がクローン人間に嫌悪感を示し、人間改造計画に行き着くサイボーグに楽天的であるのは不思議だ。なぜならクローン技術が生命の法則に受動的なため非人間的でないのに対し、サイボーグは能動的に身体を造り上げる結果、人間の心にも影響を及ぼすからである。サイボーグを肯定するのは、脳中心の人間観と、個人の福祉の絶対視からだが、身体能力の回復の願いが過酷な競争を生み、ひいてはこうした社会通念が文明を変えていく。

①キャリア活動の内容

この単元でのキャリア活動は次のア・イである。

ア 教科書本文や『2045年 サイボーグオリンピック』を参考にして、サイボーグを造ることに対する自分の考えを書く。その際、肯定・否定・どちらともいえないの中から、自らの立場を明確にして述べる。

【キャリア活動の位置づけ(1)】

イ サイボーグを造ることに対する考えを友だちと発表し合う。その後、これまでの学習や発表など全体を通して、これからどのように科学を発展させていけばよいか、自分の考えを書く。

【キャリア活動の位置づけ(2)(3)】

②結果・考察

活動の中での生徒の変容は、ワークシートの記述に注目し分析するものとする。また、キャリア活動の定義に伴い、次の3つの観点で分析した。

分析上の観点

(1) 文章の内容のみにとらわれることなく、自分の考えを述べている。

【キャリア活動の位置づけ(1)】

(2) 発展的・新しい視点で述べている。

【キャリア活動の位置づけ(1)(2)】

(3) 自分自身の将来や生活に引き寄せて考えている。

【キャリア活動の位置づけ(3)】

上記の3つの観点から分析した結果が、次の表1である。上が活動アで記述したサイボーグを造ることに対する自分の考え、下が活動イで友だちと意見交換した後に記述した「これからどのように科学を発展させていけばよいか」に対する考えの分析結果となっている。

表1 『サイボーグとクローン人間』 ワークシート分析結果

ア サイボーグを造ることに対する自分の考え

観点	非常に当てはまる	まあまあ当てはまる	全く当てはまらない
1 文章の内容のみにとらわれることなく、自分の考えを述べている。	13	12	15
2 発展的に新しい視点で述べている。	14	7	19
3 自分自身の将来や生活に引き寄せて考えている。	11	11	18

欠席 1

イ 「これからどのように科学を発展させていけばよいか」に対する自分の考え

観点		非常に当てはまる	まあまあ当てはまる	全く当てはまらない
1	文章の内容のみにとらわれることなく、自分の考えを述べている。	24	7	7
2	発展的に新しい視点で述べている。	18	11	9
3	自分自身の将来や生活に引き寄せて考えている。	16	15	7

欠席 3

表1の結果から、活動アから活動イの結果の

推移に注目した際、全ての観点において「非常に当てはまる」「まあまあ当てはまる」の該当者数が大幅に増加していることがわかる。活動イにおいて発表し合うことで他者の意見を知り、もう一度自分で考えることで、活動アの時よりも深い考えに到達したのではないかと分析する。また、活動イで友だちと意見交換をしたにも関わらず、最終的に自分の考えを述べることができない、教科書本文から離れて発展的に考えることができない、自分自身に引き寄せて考えることができない生徒が依然としてまだ多くいるという現実もある。そこで、活動イで何らかの観点で「全く当てはまらない」5名の生徒に注目する。

資料6 「全くあてはまらない」に分類される生徒のワークシートから一部抜粋

生徒A	病気や事故で何かを失った人が基準は難しいが、健常者と同じラインに立てるようにいろいろ科学を発展させればいいと思う。絶対にトップクラスの健常者の実力を超えるようなことはしたらダメだと思う。
生徒T2	障害を持っていない人と同じように生きられるよう、障害者を優先させる。障害をもっていない人は安易に義手や義足を求めない。
生徒A2	医療のために科学を発展させていくことはいいことだと考える。より多くの人が健常者のように暮らすことができるようにするために科学を発展させるべきだ。
生徒A3	クローン人間よりもサイボーグの方が造ることに對してみんな樂觀的だが、サイボーグを健常者のために造るのではなく、障害者が不自由のない生活を少しでも送れるように手助けできるものを、科学を発展させて作ってほしい。
生徒R	事故にあったり、病気になった人などサイボーグを必要としている人だけが人工手足を使うなど、使う人を限定して科学を発展させていけばよいと考える。

資料6で挙げた5人の共通点は、これからの科学発展について問いかけているのにかかわらず、依然として障害者に対するサイボーグという視点から離れられないという点である。また、生徒T2・生徒Rは教科書本文で述べられていた義手・義足の例にとらわれており、生徒Aは活動イで提示した『2045年サイボーグオリンピック』を引きずって考えている。このことから、この生徒たちにとってここでのキャリア活動はあまり有意義なものではなかったといえる。

今後のキャリア活動のために考えた時、原因の一つとして挙げられるのは個々の読解力・思考力の差ではないかと考えた。生徒たちの中に

は教科書本文の内容理解だけで精一杯な生徒もいる。また、そこから発展的に考えたり、自分に引き寄せて考えることが苦手な生徒もいる。当たり前のことだが、授業内での活動ということ念頭においた時、教科の能力の差を生徒本人もそして授業者も感じざるを得ないのではないか。しかし、この実践をする上で教科の能力がないからキャリア活動は困難であると諦めるのではなく、個々の能力の差を抱える中でも、生徒一人一人が文章を通して考え、さまざまな価値観と出会っていくためにはどうしたらよいのか、もう一度考えていきたい。平成28年12月21日中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』の中に「これからの子供たちには、創造的・論理的思考を高めるために、『思考力・判断力・表現力等』の『情報を多面的・多角的に精査し構造化する力』がこれまで以上に必要とされるとともに、自分の感情をコントロールすることにつながる『感情や想像を言葉にする力』や、他者との協働につながる『言葉を通じて伝え合う力』など、三つの側面の力がバランスよく育成されることが必要である。また、より深く、理解したり表現したりするためには、『情報を編集・操作する力』、『新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力』、『新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力』などの『考えを形成し深める力』を育成することが重要である。」とある。このことから、生徒自身が自分の既に持っている知識や考えを整理すること、その上で新しく得たものを吸収し整理して、自らで新しい視点を見出していくことが求められているとわかる。キャリア活動を行う上である程度の「創造的・論理的思考」が必要であること、そして個々の能力の差をできる限り埋めていくためにも、今まで以上に思考を整理する時間と機会を設定すべきだと感じた。この単位を通して発見した課題を次のキャ

リア活動へと活かしていきたい。

(3)短歌と俳句(10月実施)での実践

今回扱った短歌6首

くれなゐの 二尺伸びたる 薔薇の芽の

針やはらかに 春雨のふる

正岡子規

その子二十 櫛にながるる 黒髪の

おごりの春の うつくしきかな

与謝野晶子

いのちなき 砂のかなしさよ

さらさらと

握れば指の あひだより落つ

石川啄木

君かへす 朝の舗石 さくさくと

雪よ林檎の 香のごとくふれ

北原白秋

白鳥は 哀しからずや 空の青

海のあをにも 染まずただよふ

若山牧水

のど赤き 玄鳥ふたつ 屋梁にゐて

足乳根の母は 死にたまふなり

斎藤茂吉

この単元では主に教科書に掲載されている短歌6首を扱い、「心惹かれる短歌を選んで鑑賞文を書こう」というテーマのもと、キャリア活動を行った。まず最初に、高校入学してから初めて向き合う短歌についての最低限の教科としての知識や鑑賞文の基本的な書き方などを指導した。その後に行ったキャリア活動は以下の通りである。

①キャリア活動の内容

先程の「(2)『サイボーグとクローン人間』での実践 ②結果・考察」で述べた反省点を踏まえて、この単元でのキャリア活動の改善を試みた。改善点は以下の2点である。

キャリア活動の改善点

- (1) 一貫して同じテーマを考え続けることで、考えを深める時間と機会を保障する。
- (2) 一方的に与えられる教材や資料のみではなく、自分で調べて、そこから考えさせる。

この改善点を踏まえて、キャリア活動のA～Uを次のように設定した。

A 提示された鑑賞文の書き方にならって、自分の選んだ短歌に描かれた情景やそこに表現された作者の心情、それを読んだ感想などを踏まえた鑑賞文を書く。

【キャリア活動の位置づけ(1)】

I 今回扱う6首以外の短歌で、俵万智「サ行音 ふるわすように 降る雨の 中遠ざかり ゆく君の傘」の授業者の書いた鑑賞文(資料7)を例として提示した。ここでは活動Aの鑑賞文と明らかに異なる、作者の生涯や人物像を踏まえた鑑賞文を生徒に見せた。その後、生徒一人一人が作者について調べ、それを踏まえた鑑賞文をもう一度書く。

【キャリア活動の位置づけ(3)】

資料7 生徒に提示した授業者の鑑賞文

「寂しい」「仕方ない」「すまない」「切ない」「それでも…」

遠ざかってゆく愛しい人の後姿に別れの言葉を重ねる。呼び止められるわけでもなく、すがりつけるわけもない。ただ湿っぽい雨の音に重ねて、切なさに心を震わせる。

この短歌は「サ行音」の感情を読者に想像させるところに表現の面白さがある。「ふるわすように」「雨」「遠ざかり」などから、それが悲しい心情だということがイメージしやすく、読者それぞれの別れのシーンを思い描きやすい。

U 原則として同じ短歌を選んだ者同士でグループになり、お互いの鑑賞文を発表し合う。発表する中で自分の鑑賞文とクラスメイトの鑑賞文の同じ部分や異なる部分を理解し、意見交換する中で考えを深めながら、最後に

もう一度鑑賞文を書いて仕上げる。

【キャリア活動の位置づけ(2)(3)】

②結果・考察

活動の中での生徒の変容は、繰り返し書いた鑑賞文に注目し分析するものとする。また、キャリア活動の定義に基づき、次の2つの観点で分析した。

分析上の観点

- (1) 自分自身で短歌に描かれた情景や心情をイメージして鑑賞文を書いている。

【キャリア活動の位置づけ(1)】

- (2) 作者の生涯や人物像を踏まえたり、クラスメイトの意見を参考にして、より深く読み味わっている。

【キャリア活動の位置づけ(2)(3)】

上記の2つの観点から分析した結果は、次の表2の通りである。なお、活動アで書いた鑑賞文は生徒たちが初めて書いたものであるため、観点(2)の面からの分析はしていない。

表2 短歌と俳句 鑑賞文分析結果

ア 鑑賞文(1回目)

観点		非常に当てはまる	まあまあ当てはまる	全く当てはまらない
1	自分自身で短歌に描かれた情景や心情をイメージして鑑賞文を書いている。	25	9	5
2	作者の生涯や人物像を踏まえたり、クラスメイトの意見を参考にして、より深く読み味わっている。	—	—	—

欠席 2

イ 作者の人物像を踏まえた鑑賞文(2回目)

観点		非常に当てはまる	まあまあ当てはまる	全く当てはまらない
1	自分自身で短歌に描かれた情景や心情をイメージして鑑賞文を書いている。	32	6	2
2	作者の生涯や人物像を踏まえたり、クラスメイトの意見を参考にして、より深く読み味わっている。	18	15	7

欠席 1

ウ グループワーク後の鑑賞文(3回目)

観点		非常に当てはまる	まあまあ当てはまる	全く当てはまらない
1	自分自身で短歌に描かれた情景や心情をイメージして鑑賞文を書いている。	33	4	4
2	作者の生涯や人物像を踏まえたり、クラスメイトの意見を参考にして、より深く読み味わっている。	31	9	1

活動アから活動イの結果の推移に注目すると、分析上の観点(1)「自分自身で短歌に描かれた情景や心情をイメージして書いている」における「非常に当てはまる」が増加していることがわかる。これは活動イで鑑賞文を書く前に、作者について調べる機会をつくり、それを基に

してそこから作者はどんな人物かを生徒たちに考えさせたためだと思われる。活動アでは短歌そのものと向き合って鑑賞文を書いていたが、活動イでは作者のことを踏まえて書いたことで、よりイメージしやすくなったのではないか。また、活動イから活動ウの結果の推移に注目すると、観点(2)「作者の生涯や人物像を踏まえたり、クラスメイトの意見を参考にして、より深く読み味わっている」の「非常に当てはまる」が大幅に増加している。活動ウでは同じ短歌を選んだクラスメイトとグループになり、発表し合った。その際、鑑賞文を披露するだけではなく、自分はその作者をどんな人物だと思うかを必ず話すように指示した。そのため、活動ウで鑑賞文を書く頃には短歌そのものの解釈だけではなく、作者についての情報量も増えて捉え方も変容したのではないかと考えられる。

更にこのキャリア活動の中で深まりや変容が見えた若山牧水「白鳥は 哀しからずや 空の青 海のあをにも 染まずただよふ」の短歌を選んだ3人に注目してみる。

資料8 生徒N2のワークシートからの抜粋

活動アを終えての感想
詩の情景は感じられたけど、作者の感情を考えるのはすごく難しかった。人それぞれ感じるものが違うと思うから、いろんな人の意見を聞いてみたいと思った。
活動ウで書いた鑑賞文
白鳥と作者は逆だという意見もあったが、やっぱり私は白鳥と作者は同じで、自分自身のことを書いていると思った。作者は人生の中で、孤独に感じるが多かったと思うため、この歌には哀しいという思いが込められていると思う。
活動ウを終えての感想
最初の授業で短歌を詠んだ時は、他の短歌のことまで全然考えるなんてできるとは思わなかったけど、他の短歌の鑑賞文も聞いたら面白いと思った。

資料8の生徒N2は活動アの段階では鑑賞文に「作者は鳥のことをかわいそうだと思っている」と書いていたが、活動イで作者について調べた後は「孤独でも旅を続けるという作者自身のことを白鳥に重ねている」と書いた。また、「活動ウで書いた鑑賞文」の中にもあるように、同じグループの生徒M2が「白鳥は自由に楽しそうに飛び回っている情景が描かれており、白鳥と作者の心情は正反対のものだ」と発表した

のに対し、意見を述べていた。どちらが正しいかではなく、より作者の人物像とその情景にあった鑑賞文にしようという話し合いになっていた。そして、生徒N2自身はこの単元のキャリア活動を終えて、自分の選んだ短歌だけでなく、他の短歌の鑑賞文も聞いてみたいと興味を持っている。このように、学習意欲に繋がったということは生徒N2にとって有意義なキャリア活動であったのではないかと捉えた。

そして2人目は生徒I2である。この生徒は高校入学と同時に本県にやってきたという事情がある。

資料9 生徒I2のワークシートからの抜粋

活動Aで書いた鑑賞文
青い空、波が立ちあがった海で一羽の白鳥が寂しそうに飛んだり浮かんたりしている情景。この情景を見て作者は自分と白鳥とを重ねたのだと思う。染まらずに波に打たれる白鳥と、社会の荒波にもまれる自分が似ていると感じたのであろう。中学の頃、この歌は嫌いだったが、今の自分と何か似ていると感じた。
活動Aを終えての感想
昔は嫌いだったが、今は共感できるというふうになっている自分の心情の変化に驚いた。
活動ウで書いた鑑賞文
青い空、波が立っている海の中で白鳥が漂っている。白鳥から孤独に対する悲しみ、打ち勝とうとする強さ・自由・旅に対する思いが感じられる。染まらずに漂い波に打たれる白鳥と孤独で寂しさを感じている自分が似ていると感じたのだろう。中学の頃はこの歌が嫌いだったが、高校に来て作者のことを知ると、また違った見方ができた。
活動ウを終えての感想
一人では考えられなかったことをグループ学習では考えることができた。

生徒I2はこの短歌を選んだ段階で、資料9にあるように強い共感を示している。また、「活動Aで書いた鑑賞文」の中で作者と「今の自分は似ている」と書いており、授業後本人にその理由を尋ねてみた。生徒I2は「春から新しい環境に身を置いて、少し苦労している自分にそっくりだ」と話し、この時既にキャリア活動の位置づけ(3)「自分の生き方や内面を見つめる」ことをしているのだと授業者の私にもわかった。そして活動ウのグループワークを通して、白鳥が社会の荒波にもまれるかのように描かれているだけでなく、孤独・悲しみ・強さ・自由なども表していると理解して鑑賞文を書くことができた。「活動ウを終えての感想」にあるように、グループで他者の意見を聞くことで考えを深めることができ、そして中学生の時に出会った時とはまた違う感情を持ち、そしてそれ

をまたクラスメイトに伝え、互いに深め合うことができた。このことから生徒I2は「キャリア活動の位置づけ」(1)～(3)までを全て行ったと言える。

3人目に注目するのは、「(2)『サイボーグとクローン人間』での実践 ②分析・考察」の中で取り上げた資料6の生徒Rである。この生徒はなかなか教科書本文に書いてあることから離れられず、他者と意見交換しても柔軟に考え直したり、深めたりすることが難しい生徒だった。

資料10 生徒Rのワークシートからの抜粋

活動Aで書いた鑑賞文
この短歌は青い海の上で青空の中を真っ白な鳥が一羽飛んでいるという情景で、周りに染まらず飛んでいる白鳥を見て、悲しくないのかという気持ちで書かれている。周りは青なのにその中を周りの色に染まらず飛んでいて、違う色で悲しいかもしれないけど、周りに左右されずに飛んでいるのは堂々としていいと思う。
活動ウで書いた鑑賞文
この短歌は青い海・青い空の中を一羽の白鳥が悲しそうに飛んでいる。一羽の白鳥が堂々と飛んでいて良く見えるが、悲しくも見え、周りとは違う孤独を感じられる。一人で旅する悲しさや、流行に流されることなく独自の世界観で表現したいという周りに左右されない自分を白鳥で表現し、青の中の白鳥や青に染まらない白鳥の自由さを感じることができる。周りに流されず自分の思うままに生きていくことは素晴らしいことだと思った。
活動ウを終えての感想
短歌の意味や短歌に込められた作者の気持ちを考えることができ、みんなの鑑賞文を聞いて改めて自分なりの鑑賞文を書くことができて良かった。

資料10の「活動Aで書いた鑑賞文」を見ると、生徒Rは懸命に短歌の情景を読み取ろうとしているが、字面からの理解に留まっている印象を受ける。だがその一方で、白鳥の周りに染まらずに堂々としている様子がいいと述べており、十分に読み味わっているともいえる。活動イで作者について調べ、活動ウでグループで発表し合う中、この短歌における「白鳥」のもつ意味に気が付くことができた。そしてそれを踏まえた鑑賞文へと仕上げることもでき、前回のキャリア活動よりも有意義なものになったのではないと思われる。

表2や資料8～10でわかるように、この単元の「キャリア活動」は生徒たちにとって取り組みやすいものだったようである。生徒たちに考える機会や時間を十分に与えたことだけが円滑に進んだ要因ではない。最初に生徒たちは一番心惹かれた歌を選んでおり、そのためイメージが膨らみやすく共感しやすい歌の鑑賞文

を書くことになった。そこから作者について調べ、グループワークを通して他者の捉え方や鑑賞文に触れる中で、より深く読み味わうことができたのだと考える。このことから、「キャリア活動」は生徒一人一人の頭や心に入り込み、「もっと知りたい」「もっと考えたい」と突き動かすようなものでなければならないとわかった。

VI 実践全体を通しての考察

1. 生徒の意欲の面から

入学式の日から生徒の意欲を引き出すことを目標に取り組んできたが、ホームの生徒全員の意欲を引き出せたとは思わない。ホームでは資料1で示した通り、生徒たちは「過去」を振り返り「現在」を見つめることと「未来」を描くことを交互に行いながら「自分らしい生き方」を摸索してきた。「Ⅱ 実践目的」で述べた通り、そうすることで生徒の意欲を引き出せると思ったからである。しかし、12月に「なりたい自分」について生徒に書いてもらおうと、あまり具体的ではなく、内面的に「なりたい自分」について書くに留まる生徒が多かった。「頼られる存在になりたい」「一本筋の通った強い自分になりたい」などの内容が多く、そこから生徒自身が自然に考えて具体的な意欲を出すことは難しそうだった。そこで「頼られる」ためにどんな自分になればいいのか、「強い自分」になるために今何をしていけばいいのかを生徒一人一人に再度問いかけ、考えさせる必要があると感じた。そのやりとりの中で「なりたい自分」が具体的になって何をすべきかわかり、そして意欲が引き出されるのだと思う。

また、生徒の考えていることや抱いている気持ち、そして意欲は表に必ず現れるものでもないため、とてもわかりにくい。しかし、短歌・俳句の授業の後の面談で生徒Kが「短歌の授業面白かった。いろんな文学作品を勉強するには、どんな大学に行けばいい？」と私に尋ねてきた。国語の授業を通してKが文

学に興味を抱き、そこから将来を考えようとしている様子から意欲が見えた。そして生徒Rは「国語の授業みたいに、一つのテーマに沿って自分で考えて書いて、調べて書いて…深めていくことは楽しい。そういうふうの一つのことを極める仕事って、どんな仕事があるんだろう。研究者？よくわからないから探してみます。」と面談ノートに書いてきた。授業の中で自分が好きなことを見出して、そしてそこから興味のある職業を探そうという意欲が見えた。

高校生は成長段階であるため、意欲はあったとしてもとても不安定である。しかし毎日接しているとどの生徒にも程度の差こそあれ、意欲はあるとわかる。ただ、足りないのは「〇〇(目的)のために〇〇(具体策)しよう」という具体的な意欲なのではないか。そして、その意欲を具体的に引き出すために、もっと生徒に働きかけていかなければならないと考えた。

2. それぞれの立場から

①「ホーム担任」として

今回の実践ではこれまでホーム担任として特に意識せず行ってきたものを、生徒自身の「自分らしい生き方摸索」をねらいとして、キャリア教育を意識ながら計画的に行ってきた。その中で改めてわかったことは、ホーム担任は生徒にテーマを与えて考えさせることで満足してはならないということである。ノートに書いて終わりなのではなく、その後担任と面談する中で生徒は深く考えるのだと感じた。そう考えると、ホーム担任がキャリア教育の面で果たす役割は大きく、カウンセリングの要素も多く含まれそうだ。「自分らしい生き方」はすぐに定まるものでもなく、価値観と共に変化していくものであるため、それを受け入れ、見守り、時には働きかける姿勢がホーム担任には必要だと考える。

また、今後ホーム担任として計画を立てる際

には学校行事や学年行事などとの兼ね合いを見ながら、その時機に応じたテーマで進める必要がある。また、学校や教員側の都合だけでなく、生徒の置かれている状況やモチベーションなどにも気を配り、タイミングよく生徒に考えさせることが大切だと考える。

②「授業者」として

この実践では国語総合(現代文分野)の3つの単元でキャリア教育を意識した「キャリア活動」を行った。その中で実感したのは、どの単元でもキャリア教育を意識した授業は可能だということである。確かに授業時数には限りがあり、その時期に応じた学力レベルまで到達しなければならないという焦りが授業者側にはある。しかし、そんな中でもキャリア教育を意識して授業することで、得られる効果はありそうだ。実際、私が実感した効果は2つある。1つ目は日々の小テストの結果や予習復習を含む授業での生徒の様子から、国語に対する学習意欲は確実に高まっているということだ。テーマとした「生徒の意欲を引き出す」の「意欲」にはさまざまな意味が込められているが、教科の面でその「意欲」は高まっていると思う。そして2つ目は成績が良く、安定しているということだ。今回授業実践で「キャリア活動」をするにあたり、学校で「成績が下がるのでは…」と心配されることもあった。内心は私も危惧していたのだが、結果的には外部模試の成績も例年に比べると割によく、現段階では安定している。「キャリア活動」の見方を変えると、「学力の3要素」のうちの一つである「思考力・判断力・表現力」を育てる効果があるのではないかと考える。そして文章から自らの考えを持って表現し、他者との交わりの中で深め、それをまた自ら表現するという「キャリア活動」のサイクルは、学力の面でも効果的なのではないかと考える。しかしながら今回は担任ホームのみでの短期間の実践であったことから、効果については当然言い切れるものではない。今後は他の教員にも

協力してもらい、他のホームでも継続的に試みていきたい。

また、教科でのキャリア教育の際には生徒間の能力の差がある中で、どのように授業展開していくのが決め手となってくる。今回の実践ではそれがなかなか上手くいかず、私自身悩んだ。短歌の授業で、考える時間の保障や調べる機会の確保、段階を踏むごとの個の中の深まりなど、一つ一つを授業者が設定していくことが大切なのではないかと感じた。

3.「ホーム担任」「授業者」双方の立場から

この実践では「ホーム担任」と国語総合(現代文分野)の「授業者」としての2つの立場からキャリア教育を行ってきた。その中で一番難しく感じたのは、同じホームの生徒を対象にしているのにも関わらず、この2つの立場からの生徒たちへの働きかけが上手く噛み合わず、バラバラだったことである。平成28年12月21日中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』でキャリア教育について「高等学校においても、小・中学校におけるキャリア教育の成果を受け継ぎながら、特別活動のホームルーム活動を中核とし、総合的な探究の時間や学校行事、公民科に新設される科目『公共』をはじめ各教科・科目等における学習、個別指導としての進路相談等の機会を生かしつつ、学校の教育活動全体を通じて行うことが求められる」とある。このことから、ホームルームを中核としながら、学校行事や各教科・各科目、進路指導などのさまざまなものを通して組織的且つ計画的・横断的に生徒たちに働きかけながらキャリア教育はなされていくべきなのだとわかる。このように考えると、教員はホーム担任・授業者・部活動顧問などさまざまな立場で教育に携わるが、キャリア教育の上では全教員が生徒の将来や目指すべきところを見据え、同じベクトル上で計画し連携しながら取り組んでいく必要があると

考える。

参 考 文 献

文部科学省(2011)「高等学校キャリア教育の手引き」

文部科学省(2009)「高等学校学習指導要領総則」

林泰成・白木みどり(2010)「人間としての在り方生き方をどう教えるか ～小中高12年間を通した道德教育・キャリア教育～」教育出版株式会社

厚生労働省委託事業 平成22年度キャリア教育専門人材養成事業「高校におけるキャリア教育実践講習～キャリア・コンサルティングの理念・手法を活用し、学校現場におけるキャリア形成支援を担う人材を育成～」資料教科書「新 探究国語総合 現代文・表現編」(2016) 桐原書店

指導資料「新 探究国語総合 現代文・表現編」(2016)桐原書店